



待降節第 1 主日 (マタイ 24:37-44)

小さな好機も逃さず用意に充てる

A年の待降節が巡ってきました。マタイ福音書を手にも、これからの新しい典礼暦年を過ごしていきたいと思えます。マタイは本来救われるはずのユダヤ人に対して呼びかけようと福音書を書き記しました。洗礼を受けたわたしたちが本来救われるはずの新しい民だとすれば、似たような思いでマタイ福音書の呼びかけに耳を傾けることができるはずで

皆さんの手元に、文庫本の説教集「取って食べなさいA年」は届いたでしょうか。ありがたいと思ってくれるのはうれしいですが、説教集は読むものであって、家庭祭壇に大切に飾って置いていたらダメです。常に読んで、学びの足しにしてください。

ちなみに、わたしの説教集は3冊セットで、B年とC年がほかにあります。ただしこの残りの2冊は、引っ越しの荷物を隅から隅まで探してかき集めて、ようやく30セット見つかっただけで、あとはおしまいです。今のところ、皆さんにお配りする分はありません。この残り少ない説教集は、成人式を迎えるかたにプレゼントで配ろうと思っています。

あらためて説教集を確かめると、朗読されている福音書の箇所も、それぞれの日曜日の日付も、ほぼ同じのようです。これからどうしても説教が思いつかないときは、文庫本の説教集を一字一句間違えずに読み上げようと思っています。

気の早い話ですが、来年の待降節、再来年の待降節の朗読箇所と日曜日の日付を調べてみました。季節感は多少違いますが、朗読はぴったり合っています。ひょっとしてこれは、あと3年は寝て暮らせるということかなあと一人ほくそ笑んでいます。

ちょっと違う話ですが、瀬戸山の風7月号の自分の原稿を読み返す機会があって、読み返して愕然としました。「今月と来月の2回に分けて、これこれの話をしてみたいと思えます」と書いてあるのです。しかし実際は、8月号で全く別の内容を書いていたのです。これは間違いなく認知症です。「光の園」か、前任地の「福見の園」あたりに、順番待ちを申し込もうと思っています。

「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来ることからである。」(24・44)待降節は、主がおいでになるのを待つ季節です。わたしたちは主を迎えなければならないのですが、その心構えをどこに求めたらよいでしょうか。

考える一つの方法として、わたしたちが主と必ず会うことになるその時を想像することにしましょう。わたしたちが主と必ず会う時は二度やってきます。一度目はこの人生を終えた時、もう一度はイエスが栄光を帯びて再び来られる再臨の時です。

二度目の再臨の時は、わたしたちには想像もつかないわけですが、一度目、この人生を終えた時に主と必ず会う、その場面は想像することができます。わたしも50歳ですから、明日何が起こるかわからない。そ

うなると、「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」という呼びかけは、他人事ではなくなるわけです。

では何を用意しておくかということですが、わたしは、ルカ福音書の「不正な管理人」のたとえを思い出します。「そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。」(ルカ 16・4) 何かの形で、わたしのことを弁護してくれる人、わたしに有利な証言をしてくれる人を見つけておけば、この人生を全うして最初に主である神と出会うとき安心だと思います。

世間的な言い方ですが、誰かに恩を売っておけば、その人のおかげでわたしは救われるかもしれません。そういうわけで、説教集もタダで配りましたし、今月の「瀬戸山の風」に書きましたが、目の不自由な方のためにわたしの記事を録音して渡すことにしました。あるいはさまざま原稿依頼も、ほとんど断らずに書く。そうしておく、わたしは誰かの証言のおかげで、天国の隅に置いてもらえるかもしれません。

皆さんは、それぞれの最初の出会い、神と向き合う第一の時までに、何を用意するのでしょうか。わたしと同じで誰かに恩を売って、彼らに証言してもらおうと願うなら、子供たち孫たちに恩を売っておくのが手取り早いと思います。「生きている間に、わたしにこんな思い出を残してくれたなあ。」そういう形で神に証言してもらおう出来事を用意するのは、わたしは賢い人生の過ごし方だと思います。

失礼を承知で申し上げますが、ここにおられる三分の二の方々は、わたしよりも歳がいつています。ということはつまり、「用意をしておかなければ、明日何が起こるか分からない」のです。具体的に何を記憶として受け継がせてあげるのでしょうか。

まずはお一人お一人が受けたことを思い出してください。クリスマスの期間中、皆さんは馬小屋に手を引かれて行き、親子で共に幼子イエスに祈ったはずです。「あー、そう言えば馬小屋でいっしょに祈ったなあ。」それは確実に、あなたが神の前に立たされる時に有利な証言となるでしょう。

またかつては、クリスマスも復活祭も、夜のミサに行けば朝は行かなくても良いなどと、そんな都合のいい解釈はしなかったと思います。クリスマスの夜半のミサに行った人も、もう一度翌朝の早朝か日中のミサに行って、幼子イエス様にご挨拶に行ったはずです。それを忠実に、わが子に、自分の孫に、伝えるのです。子や孫たちがあなたを思い出すとき、「そう言えば馬小屋に連れて行ってくれたなあ」と思い出す。それがあなたに有利な証言となり、人の子の到来の時、顔を上げて迎えることができるのではないのでしょうか。

「人の子は思いがけない時に来る」のです。わたしたちは悠長にしている暇はないのです。あなたが用意できたはずの時間を無駄にすれば、もはやそのチャンスは二度と巡ってこないかもしれません。目を覚まして、いま用意しましょう。人の子の到来を喜び迎えることができるように、どんな小さな機会も逃さず、用意の時に結び付けていきましょう。